

見つかっただいごういろうな木簡

五百井女王の名前が書かれた木簡
 典尚従三位五百井女王 (長さ145ミリ)



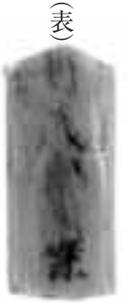
城崎郡から茜を送った際に付けられた付札
 城崎郡茜御調料 (長さ118ミリ)



国府に勤めていた人の名を書いた木簡
 (表) 客作名帳
 (裏) 客作名帳 (長さ49ミリ)



八一三年の年号が書かれた木簡
 [七美郡カ]
 (表) [案]
 (裏) 弘仁四年 (長さ52ミリ)



人の名前を書いたもの
 丸部臣浄麻 (長さ86ミリ)



九九を書いた木簡、三九廿四と間違えて書いています。
 (表) [請カ]
 (裏) [及カ]
 [当之不定春初]
 (マ) [八カ]
 (長さ316ミリ)



不用になった木簡を付札状に加工したもの
 加佐郡(丹後国)なら残画に矛盾しない。
 [郡カ]
 (長さ66ミリ)



(表) 雑解文帳
 (裏) 雑解文帳 (長さ72ミリ)



同じ文字を繰り返して書いたもの
 [義カ]
 [義義カ]
 [義義義カ]
 [義義義義カ]
 (長さ201ミリ)



荷物に付けられた付札、墨線で文字を消しています。
 [石カ]
 (表) [上]
 (裏) [上]
 (長さ96ミリ)



人の名前が多く見えます。
 (表) 額大部 [全カ]
 懸鼓言願比心早速召請
 (裏) 額大部 [全カ]
 懸鼓言願比心早速召請



[殖殖カ]
 (裏) [太麻呂薦薦金見部宮継]
 金見部 [民草カ]
 生王公宮継 [公]
 宮継継柔
 (長さ199ミリ)

小さな文字が書かれた
 削屑
 雪猶寒 (長さ29ミリ)



(写真提供 奈良文化財研究所)

■皇室とのつながりを示す木簡も

今回、見つかった木簡の中に「**典尚**（**しょうじょう**）**從三位五百井女王**」と書かれた木簡があります。

五百井女王（生誕年不詳）817年）は、光仁天皇の孫で、桓武天皇の姪にあたる人物です。從三位は古代の官位を示すもの。当時の但馬国府の長官である国守でも、四位から五位程度ですから、かなりの地位にあった人物であることが分かります。

五百井女王が從三位の位についていたのは大同3年（808年）から弘仁3年（812年）までの約4年間しかないため、この間に書かれた木簡であることが分かります。

ところで、この木簡は、裏から刃物を入れて折っています。冒頭に書かれた「典尚」の2文字ですが、当時の彼女の役職は「**尚侍**（**なうしつかみ**）」と呼ばれる天皇の后のお世話をする役所の長官。彼女の役職「尚侍」を「典尚」と書き間違えたことに気付き、折って廃棄したのかも知れません。

また、なぜ、彼女の名前を書いた木簡が見つかったのか、従姉弟である良岑安世との関係で但馬に招かれたのか、あるいは五百井女王が皇后宮に但馬のどこから税の一部として物品を納める封戸の制度があり、その事務を国府で行っていたのかなど、多くの謎を残す興味深い木簡です。

■木簡の書かれた年代から

但馬国府は、『日本後紀』延暦23年（804年）正月に、「但馬国治を氣多郡高田郷に遷す」とあることから、どこかの場所から氣多郡高田郷（祢布ヶ森遺跡周辺の地名）に移転したことが分かっています。

その史料を裏付けるように、これまでの祢布ヶ森遺跡の調査では、「天長三年（826年）」や「承和元年（834年）」、「寛平九年（897年）」など、延暦23年以降の年号を記した木簡が出土しています。

しかし、今回、出土した木簡に「弘仁四年」の年号が見えることや、五百井女王の官位から、西暦810年ごろのものであることが分かり、従来より約15年早い段階から、祢布ヶ森遺跡が但馬国府として機能していたことを裏付けるものとなりました。

■これからの課題

今回の木簡の出土は、平安時代初期の但馬国府の実態を解明する上で、大変貴重なものとなりました。

さらに、各地の国府の機能を知る上でも欠かせない資料となり、全国的な注目を集めています。

203点の木簡は、教科書に書かれていない但馬の歴史を、1200年のときを経て鮮明に私たちに伝えてくれました。

先人たちが遺してきてくれた大切

な遺産を守りながら、これからも調査・研究を進め、古代但馬の歴史を解明していきます。

なお、出土した木簡は、但馬国府・国分寺館で大切に保管されています。劣化を防ぐ処理をしていないため、現在、公開の予定はありません。今後、企画展の開催や報告書の刊行など、皆さんに見ていただく機会を設けます。

【用語解説】

●木簡

木の板に墨で文字を書いたもので、主に、発掘調査で土の中から見つかったものを言う。役所で書かれた公文書や、文字の練習に使ったもの、捨てられた削りくずまで、書かれている内容や時代はさまざま。全国で約32万点が出土している。

●詩経

中国最古の詩集で、当初3千編あった膨大な詩編を孔子が311編に編集し直したと伝えられる。平城京に置かれた学問機関「大学」では、『詩経』の注釈書を学ぶべき教材の一つとして規定している。多くの木簡が見つかった平城京でも、詩経が書かれた木簡は見つかっていないことから、あまり普及していなかったと思われる。

夏休み特別講座

「木簡を作ろう!-これでみんなも古代の役人だ!-」

木簡に関する簡単な説明の後、実際に板を削り、木簡に書かれた文字や好きな文字を書いてもらいます。古代の硯も体感できます。

- ◇日時 8月3日(日)午後1時30分～3時
- ◇場所 但馬国府・国分寺館 総合学習室
- ◇参加費 100円(材料代)
- ◇定員 10人(先着順)

《申込み・問合せ》但馬国府・国分寺館 ☎42-6111

